審査の結果の要旨

論文題目　　バルザックの作品における「脳」と「知能」の問題

氏　名　　東 辰之介

本論文は、バルザック(1799-1850)の初期作品から『人間喜劇』全編に遍在する「脳」と「知能」の問題を考察することによって、作者の人間観および社会観を明確にすることを目指した野心的な試みである。

第１部「作品中に現れる「脳」のイメージ」では、「脳」を中心にした登場人物の描写には、当時の医学的知見（脳内のリンの多寡が人間の知能を決定するとしたクエルブ（1805-1867)、頭蓋骨から脳の形状を推測し人間の性格と関連づける骨相学を提唱したガル(1758-1828)、首の短さが知能の高さを示すというビシャ(1771-1802) 等の説）の影響が強く見られることを指摘した上で、『幻滅』(1837)と『あら皮』(1831)を例に取り、脳が人物の運命を決定づけるというバルザック独自の「器官決定論」が形成されていることを明らかにする。偉人、天才、あるいは凡人、愚鈍、等の登場人物が、特徴的な「脳」によって差異化され、各人物の知能と生命力の横溢と蕩尽が宿命論的に小説を構成していることを明らかにする。

第２部「近代社会における＜知能＞の新秩序」においては、中流階級の限られた「知能」の例として、能力以上の出世を志して破産する主人公を描いた『セザール・ビロトー』(1837)、民衆の危険な「知能」の例として、低い知能の持ち主が時に異常な力を発揮して復讐に成功する『従妹ベット』(1846)、そして活躍の場をえない知的エリートの救済として理想郷の再建を描いた『村の司祭』(1838)を例示することによって、「知能」によって新たな階層と秩序とが生み出されるとするバルザックの社会観が読み解かれる。

第３部「「知性」の時代の病とその克服」においては、特異な作品『近代興奮剤考』(1839)をとりあげ、バルザックは脳を刺激しあるいは麻痺させる興奮剤として、アルコール、コーヒー、タバコをあげ、この３種の興奮剤はそれぞれ労働者、芸術家、有閑階級という社会階層を主とする消費層をもち、アルコールとタバコは脳の麻痺のもたらす快楽によって現実逃避を生むのに対して、コーヒーは知的エリートの創造的頭脳労働を促進させる、と作者の意図を解き明かす。最終的にバルザックは、知能によって階層化された近代社会が示す新たな病状を抉り出し、その全作品において人間の愚かさ、「平凡あるいは卑俗な魂」を描くのであり、その「愚かさ」は、人間の生まれつきの素質、すなわち「脳」に原因があるとみなす。それでは、不幸を運命づけられた低い知能しかもたない者たちがいかに救済されるべきかというバルザックの思想を論者は問い返し、慈善団体の活動に献身する主人公ゴドフロワを描く『現代史の裏面』(1848)に、弱者の連帯による共同体の再構築という一つの救済策の提案を読み取るのである。

本論文は、バルザックの『人間喜劇』全編及び周辺作品から書簡に至るまでを丹念に渉猟し、「脳」と「知能」の問題について作家が論じている箇所を選び抜いて考察し、影響をうけた１９世紀前半に至るまでの脳科学の進展状況を踏まえつつ、当該問題がバルザックの思考と作品を構成する重要なテーマであることを明確に示しており、「脳」の観点から随所に優れたテクスト読解が示されている。とりわけ、小説の埒外におかれてその重要性が看過されてきた『近代興奮剤考』を、創造的知能の活性化という観点から見直し、『人間喜劇』を締めくくる結論部分をなし、バルザックの人間観・社会観を端的に示す理論的エッセーであるとする論者の視点は、新鮮かつ卓越したものである。ただし、「生まれつきの脳が人の運命を決める」という単純な決定論と、『人間喜劇』全編を構成する作家の強靱な思考力、そして人間の「愚かさ」を描く作品の無尽の魅力との間には、なお埋めがたい乖離があり、今後いっそうの研究展開が期待される。

以上から審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。